

小松弘愛さんは八十二歳になる。最近お会いしていないので、ただだけお元気なのかはわからないが、小松さんの移動手段はむかしもいまも自転車である。いまも颯爽と自転車を乗り回しているのだろうか。『眼のない手を合わせて』（花神社）から冒頭の「わたしの背後で」を全篇引用する。

センダイヤ桜の花びらが散り敷く道  
キュッと自転車のブレーキをかけ  
前方の光景を眺める

幼い女の子が水色の上着のポケットから  
一握りの花びらを取り出して散らし  
また取り出しては風に流している

花びらがなくなれば  
地上の花びらを小さい手にかき集め  
ポケットいっぱいにくらませて

女の子のそばに行ってみたいと思ったが  
あえて  
手前で折れる小道に自転車を乗り入れる

わたしの背後で  
センダイヤ桜の花びらが風に散り  
風に流れる

の花びらが風に散り／風に流れ」ている。世間は花吹雪とともに生成の悦びにみちている。それはそれでいい。そんな世間こそと背をむけるのも一興である、とばかりに。  
「拋物線」という詩は直截的に老いを扱っている。全篇を引用する。

親しき友よ。  
われ死なば、  
柳を植ゑよ。  
わが墓に\*。

わたしは  
改めて何かの木を植える必要はない  
初夏になれば  
山を黄色く盛り上げるようにして  
椎の花が咲く産土うぶすなの地の

いや  
あの雑木山のあたりは  
今は  
買収の話も沙汰止みになっているけれど  
ゴルフ場の青写真まで作られている所

わたしは  
物置から

小松さんの作品は、自分の気持ちをきつちりと説明することが多い。自分のおもいをうやむやにすることが少ない。一見あまいにみえる表現でも自分のおもいは語っている。語りきらなくても、小松さんのおもいを忖度できる作品が多い。それは小松さんの「きつちりした」性格がそうさせているのでは、とかつておもっている。この「きつちりさ」がときとして、作者自身に、あるいは読者になにかしらの結末を与えてしまうことがおこった。

冒頭に置かれたこの作品は「あえて」おもいを「手前で折れ」て「背後で」花びらが「風に流れる」のを感じている。そう、「あえて」おもいを断念しているのだ。この桜の花びらを両手で咲かせている少女にむかつて自転車を漕ぐことを断念した小松さんの姿に、消滅と生成の理ことわりを感じた。

センダイヤ桜の咲き誇る道で少女が花びらをこれ見よがしに咲かせている。生成の光景である。その光景に息が詰まりそうになった小松さんは「あえて」手前で折れる。消滅の選択である。もし、その花吹雪のなかに自転車を踏みいれてしまったら、昂揚した感情に身も心も奪われて、即座に死んでしまうかもしれない。死ぬことに無念さはないが、花吹雪という歓喜のなかにいる少女の前で死はふさわしくない。それに、あの花吹雪はまばゆすぎる。わたしの心は痙攣をおこすだろう、きつと。

そんな小松さんの（みずからの老いにたいする承認といっていい）自覚が、「あえて／手前で折れる小道に自転車を乗り入れる」ことになった。しかしわたしの背後では「センダイヤ桜

彼岸の墓参りに持つてゆく  
下草を刈るための鎌を取り出し  
砥石にあてて鏝を落とす

その刃を  
太陽の光にギラッと反射させたあと  
大きく宙に振り下ろしてみる  
ゴルフボールの描く拋物線の  
足を切るようにして

\*ミュッセ（仏）の詩から

老いを、死を強く意識しながらも、小松さんは自分の心身を砥石で研ぎ、鏝を落とし、太陽の光を反射させ、老いと死の拋物線をグイッと切りとる。そんな光景が描かれている。

人はだれしもある年齢がくると、死と老い、を意識せざるをえなくなるが、そうはいっても簡単に認めたくはないものだ。少女のまき散らす花吹雪の前では「あえて」老いと死を意識したが、ここでは、老いはそうであるけれどもそう簡単に受け入れられるものか、とばかりに、老いと死の拋物線を鎌で切りとることで、老いと死を猶予したいという小松さんの強いおもいがにじみでている。

そんなふうにご詩集は老いと死の前に佇んでいる一冊だった。

昨年、詩集『そのようにして』（ふたば工房）で日本詩人クラブ賞を受賞した林嗣夫さんは一年もたたないうちに『解体へ』（ふたば工房）という詩集を出した。目が悪くなり、書いたり読んだり苦痛になってきたから早う出さんと、などと笑っていたが、林さんはほくよりひとまわり上だから八十になるのだが、まだまだお元気で、ひよっとしたらばくより精神年齢は若いかもしれない、とお会いするたびおもう。詩にたいする思いも熱い。現在、土曜美術社出版販売からの『現代詩文庫』を準備している。

かつて『四万十川』（ふたば工房）という詩集では、ふるさとの祖先の墓を高知市に墓替えして、ふるさとを心身ともに去ったのだが、今回は父親が高知市に建てた家を解体する始終を詩にまとめた。解体——それはみずからのふるさとへのおもいをも解体することにも通じる。

詩集『解体へ』から「帰郷」の部分引用。

6 kmにも及ぶ久礼坂を登り切り

高南台地に出ると 雪が降りはじめた

四国中央の不入山を源流とする四万十川が

ここで西へと向きをかえ 蛇行を重ね

愛媛県境近くまで流れ下ったところが

わたしの故郷である

(略)

故郷にはすでに別れを告げ 生家はない

その脱出した故郷がなぜか気にかかり

風景」に出会い、少々感傷的になりながらも、猪の肉を手に入れるため「しかるべき店に入ると／『イノシシはうちには置いてないぜ。獲ったらみんなで、／分け合って食べるけんねえ』／次に立ち寄ったスーパ―では／『うちにはないけんど、知り合いのところにあるかもしれない』／雪の降るどこかへ向かって電話をかけてくれた」。そんなふうには、獣や神や村人たちのなか「店のおばさんの電話の向こうには 獣や神や村人たちの／ひそひそ話でつながる生臭い共同体のようなものが／息づいているような気」がした林さんは、かつての共同体がいまも息づいていることをよるこばしくおもっているのだろう。

とはいえ、これだけでは物足りなさを覚える。たしかに林さんも「何かを確かめたくて」と言っているのだから、これ以上のもが確かめられないことだったかもしれないが、「村に残つてもがきながら地域を支えている人たちが」が生存の術として見聞きし、林さん独自の視点で「確かめた何か」を書きしるしてほしかった。見聞きできなかったことを書いてほしい、というのは無い物ねだりだと承知しているが、ここは村の人たちとの立ち回りがあってほしかった。

猪肉を十分に買う

おまけに特製の味噌まで付けていただく

店を出るときには雪も止んでいた

四万十川沿いの長い道のり

異界のにおいのする不思議な国をくぐり抜けてきたように思う

何かを確かめたくて

こうして家族を連れて雪の中を走っているのだ

日本が経済成長の道をたどる中

村からは止むことなく人人の流出がつづいた

わたしが故郷を離れたのは ます中学校卒業の時

数少ない進学組として多くの級友を後にしてきた

次は父が営林局を退職し

故郷に残っていた祖たちの骨を

高知市の新しい納骨堂に移した時

掘り出した頭蓋骨を父が鍬の頭で叩き割り

幾片かずつ拾って壺に納め

残りの骨はもとの穴に掻き込み

石碑も入れ 土をかぶせ 塩をまいた

(略)

わたしが故郷へ向かうのは

捨ててきた骨たち

村に残つてもがきながら地域を支えている人たちのことが

何かのにおいに意識をよぎるからである

と書く林さんは再度のふるさと訪問で確かめたかった「何か」を見つけただろうか。そのことはこのなかには書かれていないのでその具体はわからないのだが、「いま雪の中に薄らいている山山 そしてこの川／父と母の青春の舞台であり／父と母の青春の舞台であり／わたしの少年の頃の語り尽くせない原

峠からはるか見おろすと

かなたの土佐湾に夕日が差し

きらめいていた

と、ふるさとへの旅を終えるが、やはりここでも不満が残る。「異界のにおいのする不思議な国」をもうすこし具象化してほしかった、と。読者であるぼくには、ここで書かれただけのことで「異界のにおい」が充分に伝わってこなかった。「異界のにおい」という嗅覚を言語化することでこの一篇はもつと膨らみをましたのではないかとおもう。

最後は、ふるさとの村を脱出して新しく住み暮らした高知市の家の解体である。「解体へ」から部分を引用。

十年にわたって空き家となっていた父の家を

この春 解体する

屋地は一番下の弟が相続する

おいしい無花果も大きなビワの木も切つてのける

摒ぞいの肉桂だけは残すことにした

父の四万十川の思い出の木だ

この小さな平屋の家で

退職後の父は聖書を読み 絵を描き

日曜日へ好きなものを買いに行き

年を重ねた

母は七十歳を過ぎたころから

少しずつつ心に異変を来たした

聞こえるはずのない声が聞こえはじめた

遠い祖たち

満州へ行ったまま帰ってこなかった幼友たち

その呼び声に誘われて家を出る

戻らなくなり捜しに行ったことも幾たびか

そんな家を解体することは、物体としての家屋の解体以上に、父と母を解体することであり、林さんが生まれ育ったふるさとの記憶を解体することであり、それ以上に、林さん自身、老いて、死が現実化している身を解体し、死の現実とむきあう自分を再生することに繋がっていく。

孫娘はいま

花の終わったタンポポを引きちぎって

小さな落下傘を吹き飛ばすのが好きだ

道ばたや庭のすみに

白い玉を目ざとく見つける

うまく空気をためて吹き出すことができなくて

綿毛を口にくつつけたりしている

ふるさと脱出――

しかし どこへ？

「幸福さいはつなるかな、柔和なる者。その人は地を嗣ついでがん」(マタ

イ伝福音書)

水田さんがあと十年ぐらいいたら、父親と自分の関係性を相対化できるだろうし、そうならば、思索と言語の関係が適度な緊張感をもつ詩として再生できるのではないだろうか。そのときの詩を読んでみたい。詩人とは言語によってみずからの世界を構築することで現実社会を生きているのだから。

入院当初の詩と、父親が亡くなったときの詩を引用する。

もつともらしい蘊蓄を垂れては

目の前の身内を見下しては

自分の思い通りにあがく男

当たり前の正論を

誰も分かっていないという口調で

論じたかと思ったら

全く逆の論点から切り崩す

と思えば一転医者や看護師を口汚くののしり

勝ち得た二泊三日の外泊の帰りに

明日転院が決まっている方針に

治療の手立てもないのなら

部屋代払ってより

家で死にたい

そう切り捨てた

(略)

食わずに

煙草をくゆらせ

酒を嗜み

これはわたしの名前の由来であると父に聞いたことがある  
自分の内なる「地」を  
尋ねる手だてもないままに  
花が咲き 雲が流れ  
万物は去っていく  
飛び上がったタンポポは わたしの知らない場所で  
新しい着地を試みるだろうか

小松弘愛さんは幼い少女の花吹雪に「あえて」背をむけたが、林さんはタンポポの落下傘が自分の知らない場所で新しい着地を試みるだろうか、と孫娘に生の再生の委託をしている。ともに老いと死をかたわらに、老いと死の先にある自我の最後の揺らめきを見つめていると言っているだろうか。

本誌の西川宏さんが水田安則というペンネームで『残像』(ふたば工房)という詩集を出した。

多くの父親は早くに死んだので息子と父親の葛藤というものがどんなものかわからないが、この詩集を読んでいると、癌で闘病中の父親の硬直した自我にたいしての息子の愛憎入り乱れた感情が生煮えのまま展開していて、詩を読んでいるというよりはドキュメンタリーを読んでいる感じだった。実際ここに収められている作品は、散文にしてしまえば父親との距離が短かすぎるため饒舌になってしまい焦点が合わなくなるので行分けしたら、詩の形式をとってしまった、というような作品が多く、

排泄に汚れた衣服や空間も  
全て怒りに任せ我流を貫く

まだまだ元気

と云い切ってしまうその生命力を

呪うしかない

多くの奥深い領域には

誰にも気づかれない

激しく萌える殺意が

燻ぶっている。

(「殺意」部分)

この男のお陰で

適切な在り方への測へと

随分近づくことができた

でも

限りなく

限りなく

近づけるのだが

更にその向こう側の

近づけない領域というものを

意識させられた

この男以上に得体のしれぬ

存在が蠢いては

おいで おいで

をしては

ぼくをかく乱しようとしている

父の残像を

いつまでもいつまでも

追いかけるように。

〔残像〕全篇

フロイトは、息子は父親殺しをするものだ、と言っているが、  
そう一概に断定できるものでもないだろう。父親が息子を殺す  
ことだつてあるだろうし、父親の死後の存在に息子が自分を見  
出すことだつてあるだろう。

水田さんは父親の死後、「適切な在り方への測へと／随分近  
づくことができた」と言いながらも「更にその向こう側の／近  
づけない領域というものを／意識させられた」という幸福なこ  
とを言っている。父親の存在のおかげで水田さんは、他者との  
距離感の難しさ、自我の認識だけでは到達しえない他者の存在  
に気づく。それが父親との格闘の末だったとしたら父親は死に  
際に置き土産をしていったようなものだ。そして「この男以上  
に得体のしれぬ／存在」というのは、父親の死を看取った水田  
さんの、死にたいする距離感ともいべきもので、父親の存在  
と不在を通して知ることになった自我の在り方がいま、水田さ  
んのなかで「蠢いては／おいで おいで／をしては／ぼくをか

く乱しようとしている」。それは、存在しない父親の存在が水  
田さんの存在を揺り動かす存在となったからだろう。そして、  
父を失った水田さんは、新しい自分という幻想を見つけること  
になるだろう。